

色川大吉先生への「お別れの言葉」

東京経済大学学長 岡本英男 2022年10月1日

色川先生、東京経済大学学長の岡本です。本日ここで、私は学長として、すなわち本学の教職員を代表して「お別れの言葉」を述べるわけですが、同時に私は一人の後輩研究者、一人の教師として、いやもっと広く一人の人間として、色川先生から学んだこと、そして今後学んで行きたいと思っていることを述べさせていただき、私からの「お別れの言葉」としたいと思います。

私が色川先生とお会いしたのは、2018年10月に八ヶ岳の麓にある色川先生宅を訪問したときの一度だけです。そこで2時間半ほどお話をしたのですが、その後も手紙でのやり取りは続きました。訪問のきっかけは、私とその年の『大学報』に色川ゼミのこと、色川先生の教育実践などについて書き、それを読まれた先生がぜひ一度会って話をしたいという気持ちを持たれたことからでした。

『大学報』では、色川ゼミの活動以外にも、日韓基本条約に反対する運動の一環として、1965年12月に色川先生のリードの下で、本学で開催された全学ティーチ・インについても言及し、次のように述べました。

「このように本学の少なからぬ教員が時の政府の政策に対して公然と反対するのは大学の姿勢として問題があるのではないかと心配する人がいるかもしれないが、そのような心配はいらない。むしろ、時代の大きな国家的問題に本学の教員が真摯に取り組んだこと、そして教授会有志の熱心な呼びかけに応じ、延べ1500名余りの学生がその集会に参加したことは大学として誇りに思っている」と。

色川先生は大学報での私の主張に対して、私宛の手紙の中で、「当時の、1960年代、70年代の私たちの内面の葛藤を、こんなにも深く理解していた人が、この世にいたのだ、それが現学長であったとは！ ただただ驚愕の一語でした。」と喜んで下さいました。

このような形で手紙のやり取りがはじまり、それ以降、私は色川先生が書かれたものを機会あるたびに熱心に読むようになりました。

この前の学術記念シンポジウムの「最後の挨拶」のときにも少し触れましたが、2年前の2020年11月にこの進一層ホールで開催された森本英香元環境次官との「環境問題」についての対談の中で、私はSDGsの理念との関連のなかで「社会における細かい声を聞き取る能

力の育成こそ大学の使命であると考えている」と述べました。そして対談の直前に色川先生から送られてきた『不知火海民衆史』に言及し、「色川先生は、自ら声なき声とも言える民衆の声を聴くのが研究者の使命だと思って長年にわたってこのような仕事をされてきた」と述べました。

色川先生の仕事は全般に民衆の声を聴くことに捧げられてきたと言っていると思いますが、とりわけこの『不知火海民衆史』にはその色が濃く出ています。したがって、非常にエネルギーに研究を進め、しかも執筆も早い政治学者石田雄さんなどの研究スタイルについては、次のようになかなか手厳しいところがあります。

石田雄さんの研究はまるで使えないものでした。というのも、調査に行くと、自分があらかじめ用意したアンケートどおりに質問するんです。もう全部用意してあって、現場でぴしゃぴしゃっと入るようにアンケートを作っているわけ。それで統計を取るんだとおっしゃるだけで、私はこれでは全く意味がないと正直に伝えました。

色川先生は、「最初のお子さんは何年に生まれましたか」というような形式張った聞き方をするのではなく、お産の苦労話辺りから始めて、ご自身の肉親関係やきょうだいとの関係から徐々に広げていかなければ、話をしようにも話せなくなってしまう、と言います。

この「聞く」ということの意義について考えていたとき、私は伊藤亜沙さんの「「うつわ」の利他一ケアの現場から」という一文に出会い、読んでなるほどと思ったことがあります。

伊藤さんはそこでおおよそ次のようなことを述べられています。

自分自身を、他者を助け問題を解決する救済者とみなすと、気づかぬうちに権力志向、うぬぼれ、自己陶醉へと傾きかねません。これを避けるには、相手の言葉や反応に対して、真摯に耳を傾け、「聞く」こと以外にない。信頼は、相手が想定以外の行動をとるかもしれないという前提に立っている。「聞く」とは、この想定できていなかった相手の行動が秘めている、積極的な可能性を引き出すことである。

これを読んだとき、私は色川先生の人との付き合い方、他者の潜在的な可能性に耳を傾ける姿勢、「こちらには見えていない部分がこの人にはあるんだ」という距離と敬意を持って他者を気遣う姿勢、これらのことが目に浮かんでまいりました。

この色川先生の「距離と敬意を持って他者を気遣う姿勢」が私たちによく伝わってくる著作として『人物論集』があります。私は『追憶のひとびと』、『めぐりあったひとびと』の2

冊とも好きです。なかでも、石牟礼道子さんのお母さんである吉田はるのさんについて書かれた追悼文、そして本学の元職員北野比佐雄さんについて書かれた追悼文が秀逸だと思っています。

色川先生は、吉田はるのさんについて、この方は非常によくできた明るい人でした、気さくで、おおらかな練れた人で、包容力が魅力だった、と述べられています。そのはるのさんには、とても気持ちが伝わるものだから、わたしは水俣に調査に行くたびに必ず寄りました。そうすると、「いつも先生が来るのが楽しみでね」と、今日はお団子、今日はいんころ餅といろいろ持ってきてくださる。「もう饅頭でおなかいっぱいですから」とやんわり断って、後ろ髪を引かれる感じではるのさんと別れるんです。

このように色川先生は書かれていますが、私にはいつまでの色川先生の話を知りたい、また自分の話も聞いてもらいたいと思う、はるのさんの気持ちが痛いほどわかります。というのは、はるのさんのみならず、色川先生もまた気さくで、おおらかで、いつまでも一緒にいたいと思う人だったからです。

ここに列席されている何人かの方は本学元職員の北野比佐雄さんのことをご存じだと思います。北野さんは、1971年に大学に半年の休暇願いを出し、色川先生のキャンピングカーでの「リスボンからカルカッタまでのユーラシア大陸4万キロ横断旅行」に同行された方です。そういう意味で、テント生活など寝食を共にした、色川先生を最も間近で見てきた方と言っていいでしょう。

北野さんは2012年11月に68歳で亡くなられるのですが、その3年前の2009年5月31日に都心で開かれた「フォーラム色川」主催の集会に出席され、その翌日、色川先生に次のような手紙を送られています。その一部を読ませていただきます。

「拝啓 昨日はお元気なお姿を拝見して安心しました。久しぶりに先生のお話をお聞きして、昨晩は気分が高揚して寝つけませんでした。

1971年にユーラシア大陸をさ迷いながら、毎晩、先生を囲んで、いろんなお話を聞いたときの、新鮮で刺激的な思いが、あざやかに蘇ってきました。私は半年間も豊潤な時を過ごせたことを改めて幸いに思います。そんな気分浸って眠れませんでした。

世界の文明や人びとに接したことより大きなこと、何か人間の根源にある心根に響くものがあどきに存在していました。それが蘇ってきました。学生や聴講者も先生と接し、お話しする中でこれを感じるのです。歴史家としての先生の生き方への感動です。先生はとても魅力的です。」

この手紙の中で、北野さんは、自分は年齢と共に保守化してきており、「問題、課題を見つけたときに即行動することが大切だ、後では手遅れだ」という昨日の色川先生にお話が身に沁みました、と書かれています。

この「年齢と共に保守化してきている」という傾向は現在の私にも当てはまります。私自身、このことを十分に自覚し、「問題を見つけたときに即行動する」姿勢を一貫して維持されてきた色川先生から、そして声なき声にも耳を傾け、他者の潜在的な可能性を信じ、他者を気遣ってきた色川先生から、そして何よりも気さくで、おおらかで人間的包容力に溢れていた色川先生から、まだまだたくさんを学んでいきたいと思っています。

このことを色川先生に、そして皆様にお約束し、私からの色川先生への「お別れの言葉」としたいと思います。色川先生、そして皆様、ありがとうございました。